

【エッセイ】

広島だより；最終回

山 中 一 郎

はじめに

もう40年以上も前の事になる。「反社会的暴力集団」について書いた本が予想外に売れたという。おかげで書きたい本があったら装丁から全て私の自由に任すと社長に言われたので、何か書いてみませんか、私の担当の編集者から連絡があった。装丁は当時売れっ子の戸田ツトム氏に頼みたいという条件で「明治・大正・昭和・東京犯罪空間」と言う本が出来上がった。何故、此の書物の事をとり上げたのかと言えば、コレラと言う伝染病について多くのページをさいたからである。コレラそのものは、江戸時代、それ以前の外国との交渉が始まってからである。明治のコレラ騒動(大流行)は、10年の「西南戦争」から始まる。鹿児島、熊本で戦った兵士らが帰国し、全国に広めたと言われている。ついで18年の大流行がある。コレラに「特效薬」はなく、政府はひたすら「換気と手洗い」の励行を指導した。何ら打つ手はなく、死者が出ると棺桶に入れて、それを大八車に乗せ、樽酒から此の時の死者は、火葬場で処理しきれず、お台場で火葬に付したと言う。死者の運送には、若い警官が当たった。酒を飲みその勢いで焼場まで運んだと言う、列の先頭には「コレラ」と書いた旗を持った先導がいて、近寄らないよう声をかけていた。だからコレラは得体の知れない疫病として怖がられていた。被害者家族に対する、心無い言葉はこの頃もかけられていたと言う。

今でも、疫病に対する恐怖感は変わらない。コレラ菌に対するワクチンは発

見されたが、新型コロナに対する薬はまだない。だから大型冷凍車につまれた棺桶、教会の広間に置かれた多くの棺桶、広場に掘られた穴に無造作に埋められていく死体、それらの光景はショックであり、余りにも鮮烈であった。私は新型コロナが怖い。冬になり、インフルエンザが流行すると、どう対処したらよいのか、恐らく困惑するに違いない。前回のインフルエンザの時、罹患したのは在宅介護のマッサージ師からであった。私の背後で、背中、肩を揉みながら頻りと咳をする。若いよく喋る人で、彼は次の日にクリニックでインフルエンザと言われ、薬を飲んだら3日で治ったので、東京に行ってきたと言う。私も2日後、熱が出て医院に行き、検査したところインフルエンザと診断され、タミフルを処方された。飲んで2日目に可笑しい行動がみられたと家内が言った。此のマッサージ師はすぐ辞めてもらったが、彼の自覚のなさと言うか、いささか能天気な性格には抵抗のしようがなかった。

換気、手洗いにマスク～今も変わらず？

今回「COVID-19」での多くの国での死亡者処分の方法を見るにつけ、人生の儚さを感じた。令和2年の現在も、適切な治療薬はなく、もっぱら予防重視であり、その予防策と言えば「換気と手洗い、密(密接・密集・密閉)の回避」である。我々は、どこにいるか分からないコロナウイルスに、未だに、びくびくしながら毎日を過ごしている。我々の時代は、入院も出来、治療もできる。重症者も全員とは言えないまでも助かる。病院に入院出来、かなりの程度が回復すると言うのが、コレラの時との決定的違いである。日本のコロナウイルスの患者数と死亡者の数は世界的に見てもまだ少ない方であると言う。だが連日、感染者数がテレビ等で発表され、何時までも終息しないことにいら立ちは募るばかりである。

原則として広島県、広島市では感染者の個人情報についての情報の開示はなされない。にも拘らず、感染しないように自衛しろと言う。マスク着用は絶対条件である。広島市内有数の繁華街をマスクなしで歩いていた高齢者は、通行人に早速注意され、慌てて薬局に飛び込んで買い求めたと言う。些か、過剰反応ではないかと思う。広島感染者数を考えると。

私は、以前からマスク着用には違和感がなく、秋ごろからマスクは着用していた。私のホームドクターは2人いるが、彼らは殆ど絶体にと言うほどマスクを着用しなかった。インフルエンザが流行している時もしていなかった。マスクをしている私をみて、全く意味がない、自己満足ですよと半ば軽蔑気味に言はれたものだ。それが、今回はマスクを着用。していない患者には看護師が早速マスクを渡し、着用するよう指示している。今は医学的な知識もパソコン等でかなり入手できる。これが良い事かどうか私には分からない。しかし医学的な知識を持ちえなかった明治期の住民の恐怖心がどれほどであったか、その状況の一端を理解出来た気がした。と同時に、2人のホームドクターに対しては、少しすっきりした気持ちである。もっと不思議なのは「検温」である。私は朝昼晩と3回体温を測定している。平熱は低い方で、大体35度台前半である、それが、外出先で測ると36度後半になる。この前はリハビリ先で37度で、3回、測定しなおし、36度9分でようやくOKがでた。簡易測定器は本当に正確かどうか疑わしい。

ペスト、コレラ、スペイン風邪とのパンデミックを北半球に住むわれわれは経験した。私は新型コロナウィルスのパンデミックを89歳にしてはじめて経験した。とりわけ中国武漢、さらには西欧、南米、南アメリカなどのパンデミックの映像を目にし、これが事実かとうかが目を疑う思いである。まさかと思う。しかも、今のところこれと言った対策が無いと聞く。ただただ見えないヴィー

ルスの恐怖におののきながらの毎日である。今はただ「換気、手洗い、社会的距離を取り、密を避ける」ことしか方法、対策はないと聞き、かつて結核もそうだったと思う。結核は、20世紀になって効果的な薬が次々と開発され、今では「死の病」ではなくなった。コロナウイルスも薬の開発競争が行われている。このようにして、わずかな一歩ではあるが、人類が遅しく増え続けていると考えると少しほっとするのである。

カラスによる公害問題・私は精神安定剤服用

住まいの隣は、浄土宗のお寺である。結構な敷地を持つ、大きな閑静なお寺である。しかし、どこの寺院も経済的理由か墓地を整理しては売却、跡地にはマンションが建つ。幸い私のアパートとの間には巨大な「かし」の木が聳え、マロニエ、梅、棕櫚などが植わっている。それらの木々が、お墓から目を遮ってくれている。ところが数年前から、この「かし」の樹にカラスが巣をつくり、毎年そこで子育てするようになった。今、子育ての時期らしく、非常に神経質に、我々人間さまの行動に敏感に反応してくる。時には攻撃してくることもある。超低空で正面から向かってくる。恐怖を感じる時もある。一日中、暗くなくても鳴くのでいらいらし、つい安定剤を飲みたくなった。更に、これに加えて悪い状況がかさなった。通りをへだてた場所に建つ古い建物の解体が始まったのである。巨大なコンクリート破砕機が2台来て、古いマンションを破砕し始めた。破砕する音は尋常ではない。地鳴り、地響きである。耳を塞ぎたくなる程である。此の破砕の音に同調してカラスが鳴きつづけるのである。カラスの鳴くのは子供を守る自衛本能からと言う。7月、お盆が始まる頃まで、これらの騒音に悩まされた。私の気分は異常に高揚し、イライラが募りついに禁断の精神安定剤を服用した。

広島は、いま国外からの若い観光客などをターゲットにした小規模ホテル建設のブームである。広島経済局の景気判断では広島の景気動向は良いとは言えないし、良くなる期待も無いという。大体、此れと言った産業はマツダ自動車くらいである。三菱重工業も殆ど稼働しておらず、市内に持っている土地にマンションを建てることで寿命を維持してきたようなところがある。市も県も明確な都市計画のヴィジョン、青写真を持たないので、民間が勝手に事を進めるようだ。ところで、2020年はコロナの影響で広島への外国人観光客も国内の修学旅行生もまったくみなくなった。平和公園も閑散としている。と言って野鳥の天国でもない。野鳥すら見かけない。どうしたことか。

ところで、このカラスであるが、至る所に糞をして、その掃除をする管理人は全く困ったものだと頭を抱えている。退治する方法が無い。場所は殺生禁断の場所である。それにしてもこちらは迷惑この上も無い。私の通うリハビリの女子職員は広島に来て1年に2度頭に糞を垂らされたという。ハトの糞でなくてよかったねと慰めては見たもののさぞ困ったことだったろうと思う。良いカラス退治はないものかと考えたこともある。小学生の頃、音楽の時間で習ったカラスの歌は長閑なものであった。「カラス何故なくの カラスは山に かわいい 七つの子があるからさ」。この頃、カラスは町のギャング、嫌われ者ではなかった。「髪はカラスの濡れ羽色」、昭和の初期頃までは女性の憧れの色でもあった。今は街の鳥たちも、すっかり様変わりした。ハトもスズメも近頃すっかり見かけなくなった。「銀座の雀」と言う歌もあった。銀座に今、どんな鳥がいるだろうか。この歌も、なんとなく「うら寂しい」歌であった。「だが好きな歌だった」。

たいした知恵も無い私である。暇を持って余してくだらないことを考えてみた。カラスの鳴き声のうち、もっとも多いのが1回。そして3回である。あと7回、

13回、9回もあった。それ以外にない。聞いたという人も居るらしい。余程の暇人か変人に違いない。だが「カラス學」というのもあるらしい。この前、3回「カー」と鳴いたので、ベランダに出て「カー」と1回真似したところ、カラスはちょっとくびを傾けてどこかに飛び去って行った。その後も、やたらと鳴いていたので、つい何回かやってしまったが、効果ありで、少しのあいだ静かになった。その後、ビル解体工事に、頻りと鳴くので、もう一度試みてみようか思ったが、「stay home」の時期で近所から「変な人」と思われるのも嫌でやめた。

文章の構想を考えると、昔は、池の中を泳ぐ鯉を、「ぼーっ」とみていたり、川の土手に座っているうちに「構想」がうまれたものだった。今は、リハビリで多くの「高齢者」たちを眺めながら、その行動を観察している。また、その折に聞こえてくる会話の端はしから、彼らの人生がどうだったのだろうと考えるようになった。腰が曲がって歩行するのも不自由なのにいつも笑いを忘れずに編み物をしているおばあちゃん。女性はとにかく賑やかである、笑いが絶えない。が何時しか消え去って行く人も居る。施設に入ったり、亡くなったりである。また百歳を超えた人も何人か見た、前の事業所にかよっていたとき見た女性は風呂上りであったが、なんとも影がうすく、消え去るように歩いていた。その数日後亡くなったという。儂いものである。

だが此処にいる人たちは、時に冗談も言い、幸福な人たちなのだろうと思う。93歳の男性、見るからに逞しい。いつか被曝体験について聞いてみようと思った。原爆投下時、彼は、中学生であったが、郊外に家があり、たまたま広島行きの汽車に乗り遅れ被曝を免れたと言う。兄と妹は一列車前のに乗って被曝したと言う。人生とは何が起きるか、分からないものだ。彼は広島では名の知れた「競歩」の選手である。今も毎朝、練習は欠かさないと。その後、彼は

リハビリに来なくなった。しばらくして、認知症で施設に入ったと言うのを耳にした。被爆体験を聞く機会は存外大変な事である。もう一人、年齢不詳の高齢男性がいる。私より背が高く、枯れ木のように痩せている。体重は、私の半分ほどかと思う。殆んど無表情である。あまり喋らないが口跡は、かなりはっきりしている。夏でも、寒いようで、長袖のセーターを着て、その上にウインド・ブレーカーとか、薄手のジャンパーを着ている。この前の夏日、それでも寒いようでウインド・ブレーカーの帽子を出して体操をしていた。私は誰かに似ていると、思い出そうとしてやっと思い出した、水木しげるの絵本に登場するキャラクターの一人と似ている。彼から聞き出すのは、かなり難しそうだ。私よりは若いと介護士は言う。

無意識のうちに

最近、「終活」と言う言葉を聞くが、嫌いだ。このようなテレビのコマーシャルを制作している人は仕事なのだから仕方ないと思う。「死ぬこと」は、命あるものにとって、避けられないことは承知している。だが人間の「死」を「商業主義」の犠牲にする考えにはくみし難い。私は、何故か、多くの人の死に立ち会った。その様は「冷厳」である。出来れば「死」は静かに、「自然に、眠るように」迎えたい。私は、無意識によく「オールドブラックジョー」を口ずさむ。そして、はっとする。「若く楽しかった日は過ぎ去り。友は皆この世を去り。あの世で楽しく眠り、優しく、私に呼び掛けている。オールド ブラック ジョー。もう直行くよ。」このような古い歌を口ずさむのは必ずと言ってよい程、トイレの中。このほか昭和初期の小学唱歌、大正、昭和も戦中、戦後の歌を自然と口ずさむのである。何故だか分からない。然もこのように、用を足している時に限って口ずさむのである。それも完全に正確な歌詞で。ドナウ川のさざ波、ステンカ・ラージン、ブンガワンソロ、美しき青きドナウ、麗人

の歌、従軍看護婦の歌、菩提樹。ところが、トイレを出ると途端にと言ってよい程、つい先ほどまで歌っていた歌を忘れる。私も、いささか「狂人・奇人・変人の類」なのかと塞ぎこんでしまう。そこで、私はわが先輩に電話した。確答は得られなかった。

私の不安は増大する。私の周りには高学歴の人が沢山いる。T大学出身者も多い。所謂、有名大学に限定されているとも言える。人も羨む経歴の持ち主ばかりと言っていい。だが、かなりの奇人変人がいる。それだけに嫉妬心も、人一倍強い。イギリスの有名大学から、何か研究した資料があったら送ってくれと言う手紙を貰っただけで有頂天になり、ついに最後には自分は「K大学客員教授」だと思い込み、定年後もそれを名乗り朝日新聞にもその肩書でXX教室の講師として記載されていた。また、ある心理学者。とにかく型破りである。元藩主の係累(子爵、後返上後、社会大衆運動に参加)、である。父親は昭和天皇の侍従をしていたと言う。皇居御苑内を歩いていると、偶然、陛下にお会いし、「おーKか、父は無事か」と聞かれることはありえないことである。自分を、自分以上に評価されると言うことはかなりしんどい事であろうと思う。学歴が素晴らしいのに、実際、それに見合う器量が無いと感じることは、非常に「屈辱」だと思う。今この歳になって、「年金生活者です」と答えることは大いに気が楽である。

だが、また朝、日が昇り、辺り一面、爽やかな雰囲気になると、体内に生気がみなぎり、今日もまた一日、何とか頑張ろうと言う気になる。その繰り返しである。以前と言っても、20数年前、高校の同窓会の時、私が死んだら葬儀委員長を頼むと言い、もう一人の友人には「告別の辞」を読んでくれと頼んだ。しかし、2人とも先に死んでしまった。さらに、「弔辞」を読んでくれそうな大学の時の2人も、大学院の時の2人も亡くなってしまった。こうなると、生

きているのは私だけと塞ぎこんでいると、勝手に皆を殺してしまっただけで済むよと言う声が返ってきた。その時、中高大と一緒にいた友人がいるのに気が付いた。T氏である。彼が政界を引退するとき、「アメリカンクラブで」引退の会の発起人までやらされた男だ。彼は未だ生きていた。死んだらテレビ、新聞でも報道される。然も、彼は地元だった。まだ知られざる何人かいるかも知れない、と思うと、悲観する事は無いと、少し気が楽になった。だが「弔辞」を読んでくれる事は無い。最後は私だから。

そう言えば、最近健診でクリニックにいった。足が浮腫み、足首が冷えるので相談すると、一人は、もう年だからと言う。もう一人の医者は少し足先からの血液の戻りが遅い、心臓は全体に弱ってきてますね、と言い高血圧の薬を飲むように言われた。考えてみれば、90年(約32500日)ちかく働いてくれた心臓である、鼓動数は30億回ちかく働いてくれたと思う。13年は無呼吸症候群で、更に慢性閉塞性肺疾患(COPD)で95歳相当の肺を支えてくれている。全身、これ病である。と同時に人間のホメオスタシスに感謝すべきかも知れない。

還付金詐欺にあう

私も、一応は「犯罪学」は学んだ。犯罪学についての論文も書いた。いわばプロでもある。この私が未遂とは言え広島で「還付金詐欺」の被害者になるところだった。私は、「性悪説」であり、アメリカ人がポリグラフ検査を日常的に行うのも理解できる。彼らは多様な人種の集合体であり、文化的にも多様である。容易に人を信用しない。ある日の朝、電話が掛かってきた。若い男のこえである。電話に出ると、彼は「お医者様にかかっていますね」と言うので、「はい」と言うと、「実はあなたは医療費を払いすぎているのでお返ししたいのですが」と言う。「お幾らですか」と言うと「7万なにがし」と端数まで言う。

医院にも薬局にもこれまでかなり支払っていたので、その程度の金額には、格別疑いを持たなかった。すると彼は銀行口座に振り込みますと言う。それでデパートの自動支払機にいて、私の言う番号に電話してくれという。家内ともども行って電話したものの、私の地方銀行のカードはうけつけてくれない。磁気が弱いのだろう、銀行に行き磁気を確認してくれと言う。銀行に行くと、このカードは未だ新しいので、弱っているはずがない。このような理由で来られた方がいるので、警察に行ってみてはと言う、警察に行くと今日、あなたのような方が一人来られました。これは詐欺ですと言う。これ以降、全国的に「還付金詐欺」が流行する。それにしても上手な話しぶりであった。

ヒロシマ・コンプレクス

「ヒロシマより」の中で私が追い求めて来たものは、「私は何者か」と言うことであった。広島で生まれ、70年近くを異郷で暮らし、人生最後の20数年を広島で過ごした。おそらくひろしまで人生を終えることになる。私の人格形成の殆どは東京であり、今の私は「広島の大地と文化」の上に確りと立っているとは言いがたい。風来坊だと言う言い訳は通用しない。「山中家」は、風前の灯火の如き悲惨な状況である。枝葉を広げて大空に向かって高く伸びていく勢いはない。だが、これがこれからの日本の一つの典型になるかも知れない。無理やり接ぎ木してまで残そうと言う人いるかも知れないが、自然に朽ち果てるならそれでもいい。ヒロシマ・コンプレクスになって、イライラした気分の中で悩むより、ハイマートロスで通すのも良い。全ては「自然体」で。これが私の流儀。数年前、中学生だった次男の娘が、宿題で「家紋と先祖」について調べるように言われた。家紋は「抱き茗荷」だと言うことは聞いていたが祖先については三代前以上は知らない。「大河ドラマで騒がれるようないえがらではない、『足軽、小物』か『農民』で人を殺すなどとは言わなかったと思う。恥じる家系で

はない」と。

今の時代、家紋とか家系にこだわる必要も無い。そのことにどのような意味があるのか、「家父長制」も崩れ、親子兄弟のつながりも希薄になりつつある。もしこのような事で差別されるならそれもまた結構。広島に居る風来坊で変人と言われている爺様が、戦争で負けた時、全て滅茶苦茶にってしまったそうです。何やら過去と断絶するとかと喚いて。どうせ風来坊の言うことですのでしかとは分かりませんが、,,,,,,,,,,,,,

「ハイマートロスとヒロシマ・コンプレクス」について終わりにしようと思った。しかし、[COVID-19](新型コロナウイルス)の流行で心のなかのスケジュールが狂ってしまった。もし生きていたら、少し明るい話題に挑戦してみたい。今は《Que sera sera》です。とは言え、これ程の恐怖心を抱いたことは、これまでになかったことだ。